

氏名	佐藤 泰雄		
学位の種類	医学博士		
学位授与番号	乙第44号		
学位授与の日付	昭和38年7月19日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)		
学位論文題目	各種制癌剤による手術創の癌再発予防に関する実験的研究		
論文審査委員	教授 砂田輝武	教授 陣内伝之助	教授 児玉俊夫

学位論文内容要旨

手術後の癌の再発を予防する目的で、手術創に制癌剤を使用し、脱落遊離癌細胞を根絶せしめることが出来るならば、更に癌の根治手術の遠隔成績を向上させることが出来ると思われる。

著者は臨床的に遭遇する手術創、特に腹部内臓癌の手術の際の腹壁縫合部の癌再発を各種制癌剤（ナイトロミン、カルチノフィリン、アザン、テスパミン及びマイトマイシン）を術直後に局所に使用して予防する目的で、これを実験的に検討した。その結果、高単位の制癌剤の局所使用は癌細胞のみならず、正常腹壁筋組織をも破壊し、創傷治癒機点を阻害し、その他の合併症の生ずる怖れがあるので、使用薬剤と使用量の選択には十分慎重を期すべきであり、更に家兎腹壁の切開創内に移植陽性率の高い Brown-Pearce 癌を移植し、局所使用可能な範囲内の上記制癌剤を移植直後より注入してその予防的効果を検討すると、カルチノフィリン50%、マイトマイシン20%、アザン10%に有効で、ナイトロミン、テスパミンは無効であり、これらは局所の副作用を考慮するとき、局所投与のみでは使用量に限界があると推定された。又かかる投与量では白血球減少等の副作用はみとめられず、予防的効果の認められたものには Brown-Pearce 癌移植家兎に現われる類白血病性反応は見られず、末梢血液像の変動は殆んどなく、これは制癌剤の予防的効果判定の一指針となった。

第I篇 各種制癌剤の横紋筋に及ぼす影響について

(昭和36年6月 岡山医学会雑誌 73巻 4, 5, 6合併号)

論文審査の結果の要旨

佐藤泰雄提出の「各種制癌剤による手術創の癌再発防止に関する実験的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

癌手術後の再発の防止は癌の外科治療上極めて重要な問題であり、この癌再発には色々な原因があげられるが著者は手術創への再発をとりあげ、制癌剤の局所応用の価値について研究を行なった。

まず第1編では家兎について各種制癌剤を腹壁切開創の局所に用いたさいの筋の変化と創傷治癒に及ぼす影響を組織学的に検し、薬用量の1/3~1/10以下の濃度の使用においては、Azan, Tespamin では殆ど変化をみないが、Nitromin, Carzinophilin では高単位使用では組織に著明な変性を来し創傷治癒を阻害し、とくに Mitomycin では破壊が高度であるという結果を得た。次に第2編では家兎の腹壁を切開し筋肉内に Brown-Pearce 癌を移植し同時に各種制癌剤を局所に注入して移植腫瘍の発育を観察し、あわせて末梢血液像を検し、Nitromin, Tespamin では移植癌の発生は予防できず、Azan では10例中1例に、Mitomycin では10例中2例に発生を予防しえたにすぎなかったが、Carzinophilin では10例中5例に予防しえ、最も有効であった。また癌の発生を予防しえた例では類白血病性反応はないが、制癌剤が無効で腫瘍の発育をみた例では類白血病性反応と好中球、単球の増加とが著明であったと結論している。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。